

# 『風に紅葉』における『狭衣物語』の影響

——対極する男主人公——

河野千穂

## 序

物語『風に紅葉』の成立は、樋口芳麻呂氏が引歌と和歌から、南北朝頃の成立という結論を出されており、そのことからいわゆる中世王朝物語の最末期作品と考えられる。『宇津保物語』『源氏物語』『狭衣物語』など先行物語からの影響は、中世王朝物語の宿命とも言え、『風に紅葉』においても、安藤亨子氏・小木喬氏・辛島正雄氏らが、先行物語の影響を指摘されている。それら先行物語のなかでも、とりわけ『狭衣物語』には、冒頭文・構想・引用・描写など多岐にわたって、『風に紅葉』との類似や共通点が認められる。『風に紅葉』への『狭衣物語』

からの影響については、辛島正雄氏も指摘しておられるが、辛島氏は、

「表面的な影響を指摘できるにすぎない」と述べられている。しかし、両者の類似点を調査するにつれ、その影響の色濃さを認識し、『狭衣物語』からの影響を念頭に『風に紅葉』を読みすすめると、その男主人公の人物造型に興味深い対立関係が見いだせるのである。

そこで本稿では、『風に紅葉』と『狭衣物語』との類似点・共通点を構想・引用・描写・特異な語などの方面から挙げ、『風に紅葉』が『狭衣物語』からかなりの影響を受けている可能性を指摘した上で、両物語の主人公造型の比較を試みたい。なお、類似点・共通点の指摘において、辛島氏と重なるものは、

本文もしくは注でことわることにする。また、『狭衣物語』の校異については、その系統を限定できるような根拠に欠くので、本文中にて挙げるのみとする。両物語の男主人公の呼称については便宜上、『風に紅葉』は右大将、『狭衣物語』は狭衣とした。

一

まず、類似点というものではないが、『狭衣物語』の流れをうけているものとして、『風に紅葉』の冒頭部分を挙げる。

風に紅葉の散る時は、さらでももの悲しきならひと言ひおけるを、まいて老いの涙の袖の時雨は晴れ間なく、苔の下の出で立ちよりほかは、何の営みあるまじき身に、せめての輪廻の業にや、昔、見聞きしこと、人の語りしこと、そぞろに思ひ続けられて、問はず語りせまほしき心のみぞ出で来る。

この起筆部分は、

神無月風に紅葉の散るときはそこはかたなくものぞかなし

き

という『新古今和歌集』の引歌から始まっている。引歌や漢詩の引用で起筆するのは、周知の通り『狭衣物語』型の冒頭文で

ある。『風に紅葉』の場合、引歌から執筆動機・主題提起へと展開していくことから、通常言われる『狭衣』型の冒頭文とは少々性格を異にしているが、起筆部分のみに限れば『狭衣物語』の方法を享受していると言える。

二

次に『風に紅葉』の唐土帰りの聖と、『狭衣物語』の飛鳥井姫君の兄である僧との類似について述べる。主な類似部分を表にして示すと、次頁の表1のようになる。

上段『風に紅葉』のA・B・Cは、それぞれ下段『狭衣物語』のa・b・cに対応している。まず『風に紅葉』Aと『狭衣物語』aについて補足する。この部分は、『風に紅葉』の聖と『狭衣物語』の僧が、それぞれ男主人公に自己紹介している場面であるが、『筑紫』という地名・親たちの死・安楽寺」と共通点が多く見られる。共通点の一つである「安楽寺」が物語に登場するのは、大変珍しいと言える。「安楽寺」という語は、管見の限り『大鏡』『今昔物語集』『平家物語』『十訓抄』『歌論書(菟玖波集抄)』『義経記』『謡曲(老松)』にしか見られない。<sup>⑩</sup>王朝物語では『狭衣物語』と『風に紅葉』のみに用いられてい

表1 「風に紅葉」唐土婦りの聖と「狭衣物語」飛鳥井姫君の兄である僧の類似

<p>「風に紅葉」</p> <p>(二〇)</p>	<p>うち見奉りて、さにもたまらず畏まりまどふめり。まづ発心のはじめなど問ひ給へば、</p> <p>「(略)この四、五年ばかり筑紫に婦りて侍るなり。親はらから親類も、皆亡せ侍りにけり。昔住みし家の跡も、姑蘇台の路だに残らず、波かくる磯にまかりなり侍りにければ、今さらならぬ世の無常も思ひ知られ侍りて、安楽寺にぞ、しばし行ひ侍りしが、(略)」</p> <p>と聞こゆ。女御の御惱みのやう語り給ひて、</p> <p>「御有様をしかるべく聞きつけてなむ、(略)」</p> <p>とのたまふ御さまの、この世の物とも見え給はぬに、功德の報ひあらはれて、かたじけなければ、(略)縁どもの上に、折紙書きて、身になるる昔の衣のほかにまた重ねむ袖のおぼほえぬかな</p>
<p>「狭衣物語」</p> <p>(巻二・二五) (9)</p>	<p>「さても親は何人とか聞こえし。いつまでかかくては」とせめて問はれて、「帥の平中納言といふ人侍りけり。幼くてかたはものになりはべりにければ、「法師になして比叡の山に行ひしてあらせむ」など申ししほどに、うち続き、筑紫にて親たちのかくれはべりて後は、安楽寺といふ所になむまかりて侍りし。(略)」と言ふに、(略)、大将殿さし出でたまひて、近う召し寄せて、「さてその人はいかが聞きないたまひし。ここにもほのかに聞きし人のことなれば、耳とどまりて」などのたまふ御かたちの、言ひ知らずきよらに見えたまふを、さる山伏の目にもめでたくて、うちかしまりて、(略)賜はすれば、「もの覚えて後、木の葉よりほかに身にも寄せ慣らひはべらねば、かかるものは昔の衣に重ねさぶらはむも、いとかたじけなく侍るべし」</p>

〔狭衣物語〕校異 (傍線部分について) ・筑紫にて親たちをやたち乳大五冊本

ることから、影響関係も考えられるのである。

次の「風に紅葉」Bと「狭衣物語」bは、男主人公に対する聖・僧の態度の描写部分である。常套的な表現ではあるが、類似していると言えよう。

「風に紅葉」Cは、加持の褒美として多くの縁をもらうこと

を辞退した聖が残した歌であり、「狭衣物語」cは、狭衣が僧に自分の衣を与えた時の僧の言葉であるが、これも表現が類似している。

以上のように、「風に紅葉」の聖と「狭衣物語」の僧については、三点の類似が認められるのである。

『風に紅葉』の故式部卿の宮の女君と、『狭衣物語』の飛鳥井姫君に関する叙述には類似点が多い。『風に紅葉』の故式部卿の宮の女君の語型は、勿論飛鳥井姫君譚と言えるわけであるが、『源氏物語』の夕顔・浮舟の流れを受けた、いわゆる飛鳥井姫君譚は、中世王朝物語に多用されており、二重の先行物語の摂取もなされ、構想としては多岐にわたっている。従って、摂取の問題を取り上げる際には慎重な検討が必要であり、なるべく常套的と思われる箇所の類似は避け、設定・描写が特に類似していると思われるものを表にして挙げたのが、次頁の表Ⅱである。

まず、一点目の『風に紅葉』Aと『狭衣物語』aについて説明する。男主人公が予想外に女君に耽溺するという設定は常套的なものであるが、表現も類似しているので取り上げた。『風に紅葉』Aは、雪の降るなか故式部卿の宮の女君のもとを右大將が訪れた場面であり、『狭衣物語』aは、狭衣が野分を冒してまで飛鳥井姫君のもとへ通う場面である。珍しく女性に耽溺する男君のとまどいや、気象の悪さを冒して女君に会いに行く

という設定、目立たないように身をやつしている男君の姿、また同じ場面で男君が詠んだ和歌に「小夜衣」と「袖」が入っていることなどが類似している。

次に、二点目の『風に紅葉』Bと『狭衣物語』bであるが、波線部の文章は大変似ている。場面状況を説明する。『狭衣物語』bでは、飛鳥井姫君懐妊の夢を見た狭衣が、飛鳥井姫君を訪ねようとすると、父閔白から物忌みの知らせがあり、飛鳥井姫君のことを気掛かりに思いながらも訪ねることができない。そしてその物忌みの時に、飛鳥井姫君は乳母に欺かれて行方不明になってしまうのである。後の場面で狭衣は、

「折しも心づきなかりし物忌よ」(巻二・二〇九)

と悔やむのである。『風に紅葉』Bでも同様に、右大將が故式部卿の宮の女君を訪れようとするまさにその時、父閔白から物忌みの知らせがある。しかし狭衣と異なり、右大將はその知らせを無視して外出し、自分自身のそのような行動を不審に思うのである。物忌みに対する男君の態度は異なるが、どちらも女君を失う伏線として、物忌みが効果的に用いられている点においては同様であると言える。

三点目の『風に紅葉』Cと『狭衣物語』cについては、場面状況から説明する。『狭衣物語』cは、飛鳥井姫君の乳母が、佐

表Ⅱ 飛鳥井姫君譚の類似

「風に紅葉」(故式部卿の宮の女君)

A 右大將が悪天候(雪)にもかかわらず女君を訪れる場面  
十一月の未なれば、夕闇に雪さへかきくれて降るを、うち払ひつつ入り給へれば、ただ昨夜のままにてぞありける。

「おぼろげならず分け入りつる道の空、目立たしからじとやつしつる狩衣も、いたう濡れにけりや。かやうのまよひは身にとりて覚えぬことかな」

(略) 女の御単衣の袖の、綻びてまとはれ出でたるを取り給ひて、

小夜衣昼間のほどの慰めにかたみに袖をかへつつも見む (四五)

B 女君を訪ねようとする右大將、父関白から今日・明日はかたき物忌みであることを知らされる

殿の御方より、今日明日かたき御物忌みなるべきよし聞こえ給へるに「はや出でにけり、と申せ」

とて出でたまひぬるも、「われながらさしもかやうのことも信ずるをさしあたりて思ふことのなきほどなりけり。わが心の果てもおぼつかなるべき業かな」と思す。 (四五)

C 女君に仕えるさい京(女房)

このさい京が持たりける夫、昨夜東より上りたるよし告げたるとて、(略)「略」ていにしたがひて、この訪れ侍る者に具して東の方へもまかり侍りなばや。年長けぬる身にやさしく言ふに(略) (五)

「狭衣物語」

a 狭衣が悪天候(風雨)にもかかわらず姫君を訪れる場面

野分だちて風の音あららかに、窓打つ雨ももの恐ろしう聞こゆる宵の粉れに、例のいと忍びて粉れ入りたまへり。いつもなえなえとやつれなしたまへるに、雨にさへいたうそぼちて、にはひばかりはいととこるせきまでくゆりみちたるを、となりの山がつどもあやしがりけり。「かやうの有様は、まだならばざりつるを。人やりならぬわざかな」とて、濡れたる御衣解きちらして(略) 尽きせず語らひたまひて、あひ見ては袖濡れそむるさ夜衣一夜ばかりも隔てずもがな (卷・九五)

b 飛鳥井姫君を訪ねようとする狭衣、父関白から今日・明日はかたき物忌みであることを知らされる

殿の御かたより、「今日明日はかたき御物忌なりけるを、忘れさせたまひにける。あなかしこ。外よりの御文など取り入れさせたまふな」などのたまはせたるに、ふと覚めて胸騒げば、押さへて、「うけたまはりぬ」とは聞こえたまへど、(略) (卷・九七)

c 飛鳥井姫君に仕える乳母

「略」年老いて侍れば、行末のことも思ひはべらず。東のかたへ人の誘ひはべるにやまかりなましと思ひはべるを(略)「陸奥の国の奥の佐官といふものの妻になりてや往なまし」と思ふなりけり。 (卷・六八)

官から東国へ行くことを誘われて、妻になって行くか行くまいか迷っている場面である。それに対して『風に紅葉』Cは、故式部卿の宮の女君の女房であるさい京が、夫の勧めに従って東国へ行こうと言っているのである。さい京は飛鳥井姫君の乳母と異なり、女君の直接の女房ではなく、承香殿の女御から、言わば女君の見張りとして世話を命じられた者であるが、女君を京から連れ出す役割は、『狭衣物語』の乳母と同様であると言える。飛鳥井姫君譚の主な類似は、以上の三点であるが、構想・描写ともに、かなり類似していると言えよう。

#### 四

ここでは、今まで述べたもの以外の、設定・構想の主な類似を挙げる。

- ① 主人公の官位が二位中将から出発している。
- ② 片仮名で書かれた和歌
- ③ 主人公「しづまりたる」性格
- ④ 主人公が都を離れる外出することを父関白に相談すると、父関白は不安に思い気が進まないが許し、御供の用意をする。
- ⑤ 出家の意志の後の宮（狭衣）の心が改まるよう、院（父関白）

祈禱を依頼する。

⑥ 二十六七（三十前）と見られる太政大臣北の方（宰相中将の母君）に主人公心惹かれる。

⑤⑥について補足すると、それぞれ、後の宮を狭衣、院を父関白、二十六七を三十前、太政大臣北の方を宰相中将の母君、というように置き換えると、『風に紅葉』の構想と『狭衣物語』の構想とが同様のものとなるということである。

#### 五

最後に、引用部分の共通点について述べたい。

一つ目は、『宇津保物語』の仲澄の引用である。まず、その引用部分を抜き出す。

『風に紅葉』く「仲澄の侍従がまねやせむずらむ」（二八）

『狭衣物語』く「仲澄の侍従がまねしたまへるなめりな」

（巻一・五六）

この『風に紅葉』の引用に関して、久下晴康氏・中野幸一氏・辛島正雄氏は、『狭衣物語』経由の引用と考えられると指摘しておられる。ただ『恋路ゆかしき大将』にも、「仲ずみのじゅうをもまねび給はずやは」

というように、『狭衣物語』經由の引用がなされており、辛島氏がその論稿において、『風に紅葉』と『恋路ゆかしき大将』との近親性を示されていることから、『恋路ゆかしき大将』の影響である可能性も否めない。

二つ目は『催馬楽』の引用についてであるが、『風に紅葉』では『催馬楽』の引用は三箇所なされている。引用箇所は異なるが、そのうちの二つが『狭衣物語』と同じ歌である。

「更衣せむや さきむだちや 我が衣は 野原篠原 萩の花  
摺や さきむだちや」<sup>17)</sup> (律・更衣)

この「更衣」の歌を、『風に紅葉』では「野原篠原」(六三三)、『狭衣物語』では「衣更・萩が花ざり」(巻二・二二六)と引用している。両者とも、歌っているのは男主人公であるが、『風に紅葉』では、右大将がそれまで弾いていた琵琶を大納言の君に譲って歌いだし、『狭衣物語』では、狭衣が大納言の君から譲られた琴を源氏の宮に譲り、狭衣自身は琵琶を引き寄せて歌うといったように、場面状況も似ている。

「この殿は むべも むべも富みけり 三枝の あはれ 三枝の はれ 三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせりや 殿づくりせりや」<sup>18)</sup> (呂・この殿)

この歌は、『風に紅葉』では「三枝」(五)、『狭衣物語』では

「三葉四葉に輝くやうなる殿造りの」(巻四・二八六)と引用されており、場面状況については特に類似はなかった。ただ、どちらの『催馬楽』の歌も、『源氏物語』においても引用されていてよく知られたものであるので、単純に『狭衣物語』の影響とは考え難いものではある。

三つ目は「浄蔵・浄眼」の引用である。

「風に紅葉」→右大将が「浄蔵、浄眼のためし」も思い知られて、父閔白に閔白讓位を進言する。(三三)

「狭衣物語」→狭衣の出家の意志に気付いた父閔白が、「浄蔵・浄眼の往反遊行したまひけむを見たまひてよりこそ、妙莊嚴王も心清き三味どもを勧めたまひて、花徳菩薩ともなりたまひけれ」と思いめぐらす。(巻四・一九二)

両物語で「浄蔵・浄眼」の引用がなされていることは辛島氏も指摘しておられるが、付け加えるならば、これを引用している作品は非常に少ないと言える。「浄蔵・浄眼」が引用されている作品は、管見の限り『狭衣物語』『歌論書』(さゝめこと)、『曾我物語』『太平記』のみで、これも前述した「安楽寺」と同様、王朝物語では『狭衣物語』と『風に紅葉』にしか見られないのである。<sup>19)</sup>

四つ目は、『風に紅葉』の次の部分についてである。

神かけて仏に祈るわが心思ひかへせどなほぞ乱るる

この世とのみは覚えずや (三八)

和歌の次にある「この世とのみは覚えずや」という文章についてはであるが、これは『狭衣物語』の、

神もなほもとの心をかへりみよこの世とのみは思はざらな

む (巻四・一九八)

に拠っていると考えられるものである。しかし、これについて、樋口芳麻呂氏は次のように述べておられる。

『狭衣物語』に拠っているかと思われるが、『この世とのみは』

のみはおもはぬなかを』(西本願寺本能宣集)などもあるので、

狭衣に拠ったと断定してよいか問題が残ろう。

また、辛島氏も、

『神もなほもとの心をかへり見よこの世とのみは思はざらなむ』(『狭衣物語』巻四)に拠るか』

と述べておられる。両氏の言われるように断定できるものではないので、この引用については、『狭衣物語』からである可能性が高いものとして提示するに止めたい。

## 六

以上、起筆・構想・設定・文章・引用の面から、『風に紅葉』と『狭衣物語』の類似について述べてきたわけであるが、結論として、『風に紅葉』が『狭衣物語』の影響を受けている可能性はかなり高いのではないかと考える。しかし、これだけ表面的な設定や表現が類似しているなか、男主人公の人物造型に関しては全く異なり、むしろ対照的とも言うべきものでさえあるのである。ここで『風に紅葉』冒頭の主題提示部分を見たい。

なべて物語などに言ひ続けたる人には変りて、艶にいみじうもあらず、波の騒ぎに風静かならぬ世の理を思ひ知るかとすれど、それもたち返りがちに、よろづにつけて心得ぬ人の上をぞ、案じ出だしたる。あまり聞きどころなきは、

昔にはあらぬなんめり。

このように、冒頭で作者が、『風に紅葉』の主人公は今までの物語の主人公とは異なる主人公像なのだと言言しているのである。物語中でも、

かくすぐれぬる人は、必ず心づくしをもととしてこそ、艶にあはれにおもしろうもあるを、さこそあれ、さやうの乱



れも御心の底よりなし。(三)

という右大将の説明がある。神田龍身氏らがすでに指摘されていることであるが、作者はあえて従来の男主人公の型を踏襲することはせず、独自の人物像を作り出そうとしているのである。神田氏の、冒頭の主題提示に対するご指摘は興味深い。

「周圀で生産されてきたあまたの物語は、類型的な主人公の登場する穩当な内容のもので舞台も麗しき昔に設定したものが多いのであるが、そのことに對するあからさまな不快感がここではっきりと標榜されていることになるのである」<sup>(2)</sup>

『風に紅葉』が中世王朝物語の最末期作品であることを考慮すると、確かに『風に紅葉』の作者から見れば、それまでの物語は、共感の得難い文字通りの昔物語に過ぎなかつたであろう。南北朝に生きる作者に、果たしてそれまでの類型的な男主人公がどれほどの魅力を持ち得たか、想像に難くない。そこで作者は、いわゆる光源氏型でも薫型でもない、男主人公を造型したのである。では、作者はどのような主人公像を作り上げたのか。その人物造型を見ると、先行物語の男主人公の中でも特に、狭衣との対照関係の多さに驚くのである。

言うまでもないが、狭衣は薫型の性格を引き継いだ男主人公である。『風に紅葉』で、唐土帰りの聖の噂を聞いた際の右大

将の心中として、次のように述べられている。

さらでだにさやうのかたすすむ御心は、いとうれしく思し  
て(一九)

この描写について、辛島氏は次のように述べておられる。

「大将に仏道への傾斜がある、とするのは、ここが最初であり、やや唐突の感があるが、この期の物語の主人公の多くは薫型造型のなされるのが暗黙の前提ともいうべく、こどもそう解してよいのであろう」<sup>(3)</sup>

確かにこの場面では、王朝物語に伝統的に受け継がれてきた薫型主人公を踏襲しているのであるが、このように右大将が薫型の狭衣と共通するところは余り無く、多くは対照性が際立つ描写に終始しているのである。右大将は、

おほかた何ごとにもしづまりたる御心癖(四)

であった。さらに、自分自身でも、宣耀殿を熱愛する春宮を引き合いに出して、

あれがやうに、ものの覚えたらむもむつかしさも思ふこと  
なく、われほど心も静かによきことはなし。(三〇)

と云うのである。右大将は、女性との恋愛を初めとして、全ての事において物思いに沈むことはほとんどない。それに対して、狭衣は、

あまたの人をいたづらになしきこえつるは、人にこそたまはね、ひとかたならず、いかでかは世の常におぼされむ。

(卷二・一九二)

というように、絶えず物思いに沈み、

例の過ぎにしかた徳ぶ御癖 (卷四・三三九)

とあるように、絶えず自省を繰り返しているのである。

次に挙げるのは、前述した『風に紅葉』の飛鳥井姫君譚の続きの場面である。右大将は、物忌みを無視するほど、耽溺していた故式部卿の宮の女君が行方不明になった後、でも、

『これやまことの恋の道ならむ』と御胸はつとふたがりたれど、とかく慰め思しきまますぞ、例の人に似ぬ御心様なる。

(五三)

といった状態で、女君を探そうとするどころか、女君の身を案じることさえほとんどしないのである。しかも、右大将にとつて故式部卿の宮の女君は、唯一自分から積極的な愛情を感じた女性であるが、その女性に対してさえも、右大将は執着を見せないのである。一方狭衣は、行方不明になった飛鳥井姫君の入水を聞くとき、

さまざまにつけつつ、かかりける人々をいたづらになしてけるも、昔の世の契り心憂くおぼしつづけられて、いとど

袖のひまなし。(卷二・二〇九)

といった状態で、自分と関わった女性の不幸を思い、自己の運命を嘆くのである。このように、愛する女性を失うという同じ設定のもとでも、右大将と狭衣の態度はまさに対照的なのである。また、加行を始めた右大将は、妻一品の宮の独り寝を心苦しく思い、一品の宮に甥の中将を手引きする。その手引きが原因で、妻一品の宮は中将と不義を起こしてしまい、一品の宮は嘆き悲しむ。嘆く一品の宮に対し、右大将は、

「かやうのことは、つれなしづくりて、ひきこそ隠すならひを」

とて、笑ひ聞こえ給ひつつ、

「同じえにわが身をわくる松影を波越す末と恨みざらなむ

む

さりげなうておはしませ。人もあやしう思ひとがめぬべし」

など慰め聞こえ給ひて、(略)

「これも前の世のことと思せ」

など慰め聞こえ給へど (五八)

という態度で接し、自省するどころか、自分の行動に疑問さえも抱かない。その態度は、一品の宮が中将との不義の子を身籠

もつても変わらない。一品の宮の恨み言に対し、右大將は、  
にがにがしうなりて、

「わが頼む神も三笠の山なれば思ふ心はそらに知るらむ  
いくたびも同じことを聞こえさするかひなう。よし、今は  
忘れさせ給へ。これより後は御心ぞ」(六四)

と諭すのである。そして一品の宮が、不義の子の出産が原因で  
亡くなった後は、右大將は、最愛の妻をなくした悲しみに暮れ  
ながらも、「思ひさまし給ふ」というように、理性は失わず、  
最後まで悔恨の念は抱かないのである。右大將には、一品の宮  
を不幸にしたという自覚は無く、一品の宮を苦しめ間接的に死  
に追いやってしまった自分の罪に気付かぬまま、一品の宮を弔  
うのである。また、以前拙稿で論じたことであるが、右大將は  
一品の宮のみならず、故式部卿の宮の女君や帥の宮の姫君など  
の運命をも不幸にしてしまうのであるが、それらに対しても自  
覚もなければ後悔もしない。

一方、狭衣は絶えず、女性を不幸にしてしまう自己の運命を  
嘆く。狭衣は、自分の振る舞いのせいで、一品の宮と事実無根  
の噂が立った際も、

「すべてよからぬ我が心の、何事にものち悔しきぞかし」

(卷三・七一)

と反省して、一品の宮のことを思いやる。このように狭衣には、  
自分が女性を不幸にしているという自覚があり、その上で女性  
を思いやっているのである。そして、

世とともにものをのみおぼして過ぎたまひぬるこそ、「い  
かなりける前の世の契りにか」とこそ見えたまへれ。

(卷四・三七二)

とあるように、終始反省と苦悩を続けた狭衣の姿を写し出すこ  
とによって、物語終結を迎えるのである。

それに対し「風に紅葉」では、中將の子を身籠もりながらも  
大納言に盗み出されてしまった帥の宮の姫君のことを、右大將  
が中將に諦めるよう諭す場面で物語を終える。そもそも帥の宮  
の姫君は、右大將を慕っていたのであるが、右大將が中將に姫  
君を譲ったのであった。故に、「風に紅葉」では、全くためら  
いも無く女性を不幸な運命へと導く右大將の姿の描写で、物語  
終結を迎えているのである。

## 結

これらのように、狭衣と右大將の性格や態度は、対極的立場  
に立つものである。一時的に悲しむことはあっても、すぐ冷静

さを取り戻し後悔することのない右大将と、苦惱し続け反省を繰り返した狭衣。類似した構想・描写が多いなかで、主人公の性格は正反対に描かれているのである。ここで筆者は、『風に紅葉』と『狭衣物語』との類似点の多さに着目し、その表面的な設定・構想が類似していることと、主人公の人物造型が対照的であることは無関係ではないのではないかと考えるのである。仮に『風に紅葉』の作者が『狭衣物語』に多大な影響を受けたとするならば、狭衣の人物造型と対極的にすることで、主人公右大将の独自性・特異性を出そうとしたと考えられるのではないだろうか。代々受け継がれてきた男主人公の系譜にただ終止符を打つのではなく、その伝統的な主人公と対極的な人物造型とすることで、従来の主人公を越える主人公を描くことが、『風に紅葉』の作者の意図であったのではないか。確かに右大将は、諸氏も指摘されているように、一貫して「心得ぬ人」として描かれている。狭衣に比べ、一見、マイナス要素ばかり目につくのであるが、右大将には狭衣にはない魅力が感じられるのである。狭衣は運命に翻弄される我が身を嘆くばかりであったが、右大将は運命に翻弄されることなく、自己の運命に對峙し、冷静な判断をもって生きていく強さを持っているように思われるのである。『風に紅葉』の作者は、もうすでに、内省的

で物思いに暮れる男主人公に、魅力を感じなくなっていたのであろう。神田氏は、次のように述べられている。

「そして確かにこの人物だとして伝統的物語の主人公達のパロディ的形象にふさわしい斬新な人物像であったことには違いはなかったのだ(略)作者は揶揄すべき対象たる類型的物語世界を実は陰画として作中に沈みこませていたのであり、それを更に不発で終わらせることを明示することによってこそ、それらの世界との決定的訣別をひそかに宣言していたということなのである。『かぜに紅葉』のかかる特異な主人公像とは、実のところそのような恋物語世界を対局に据えかつ放棄することによってこそはじめて形象し得たのだ」<sup>(28)</sup>

神田氏がここで論じておられるのは、恋物語としての側面からであって、筆者とは論点が異なるのであるが、結論としては神田氏の言われるものとほぼ同様なのである。『風に紅葉』の作者は、『狭衣物語』を始めとする王朝物語の「類型的物語世界」を内包させつつも、それまでの伝統を打破するような独自の物語を作り出したのである。それは、南北朝という時代に相応しいものであり、かつ中世王朝物語の最末期作品としても十分に意義のあるものであった。

- (1) 樋口芳麻呂氏「かぜに紅葉の典拠について」(『愛知大学国文学』8) 昭和四十一・十二
- (2) 安藤亨子氏「風に紅葉・春日山」(『国文学解釈と鑑賞』四六一一) 昭和五十六・十一
- (3) 小木喬氏「鎌倉時代物語の研究」(東寶書房 昭和三十六)
- (4) 辛島正雄氏「中世物語史私注」『いはでしのぶ』「恋路ゆかしき大将」「風に紅葉」をめぐって(『徳島大学教養部紀要』二十一 昭和六十一・三)
- (5) 注(4)の辛島論文。
- (6) 諸本の呼称は、中田剛直氏の「校本狭衣物語」に拠る。
- (7) 「風に紅葉」本文は、宮内庁書秘部本を翻刻したものに適宜漢字を宛てたものである。
- (8) これについては、拙稿「風に紅葉」冒頭文の独自性(『熊本県立大学国文研究』四〇 平成七・三)において、詳しく論じている。
- (9) 「風に紅葉」の頁は辛島正雄氏の「校注『風に紅葉』」巻一・二(『文学論叢』三三六・三七 平成二・十二、平成四・三)に拠った。「狭衣物語」の本文と頁は新潮日本古典集成に拠る。

作 品	安楽寺	浄蔵・浄眼	作 品	安楽寺	浄蔵・浄眼
竹取物語語			岩清水物語語		
宇津保物語語			風につれなき物語語		
紫式部日記			半に濁る		
源氏物語語			我身にたどる姫君		
更級日記			むぐらの宿		
夜の寝覚			恋路ゆかしき大将		
濱松中納言物語語			歌論	○	○
狭衣物語語	○	○	首我物語語		○
堀中納言物語語			徒然草		○
大昔物語語	○		太義平記	○	
今昔物語語	○		あきぎ		
とりかへ別			小夜の衣		
在明宮物語語			しのび		
松浦吉物語語			白路		
住吉拾遺物語語			松陰中納言物語語		
字治拾遺物語語			八重		
保元物語語			山路の露		
平治物語語			とはずがたり		
平家物語語	○		天草版平家物語語		
十訓抄	○		狂言曲	○	
あさぢか露			謡曲		
海人の刈			御草		
いはでしのぶ					

(11) 特にとりあげるほどの類似点はないが、文章の類似もここに挙げておく。

文章の類似

「風に紅葉」	「狭衣物語」
<p>A し ofぶるか雲のよそなるほとときす音にあらはれて今は聞かばや (一七〇)</p>	<p>a (略) ほとときすほのかに鳴きわたる。「音にあらはれにけり」と聞きたまふ。 夜もすがら喚き明かしてほとときす鳴く音をだにも聞く人もが な やがて河の上に作りかけたる釣殿に、つくづくとながめ入りたま ひて (卷三・一五八)</p>
<p>B 松の下枝をあらふ白波、入海に造りかけたる釣殿、まことに心す こし。 (二二〇)</p>	<p>b 涙のこぼるるを粉らはして、面杖をつきて、つくづくと底深くな がめ入りたまへる、 (卷一・二四八)</p>
<p>C 頬杖うちつきて、火をつくづくとながめ給へる御さま、(略) は てはてはいみじう泣き給ひて、ものもえのたまはず、 (四八)</p>	<p>d 「今すこしもの心知りたまふまで、え見すなりぬるよ。(略)」 と思ふに、いみじうかなしうて、袖もえ引き放たず泣きたまへば、 (卷三・一八四)</p>
<p>D 「いますこしもの心知り給ふまでも添ひ聞こゆまじかりけるよ」と とて、いみじう泣かせ給へば、(略) (二八二)</p>	<p>e 歌どもは、扇に背かれたりしなど、同じことなればとどめつ。 (卷四・三六八)</p>
<p>E かやうの御とぶらひども、さまざま御心を尽くしてあるべかんめ れど、同じことなればとどめつ。 (六八)</p>	<p>f おくれじと契りしものを死出の山三瀬川にや待ちわたるらむ (卷三・二二八)</p>
<p>F 波越ゆと恨みしものを三瀬川いかなる水に袖濡らすらむ (七七)</p>	

A 校異 Y c・面杖を―御かはつへを竹田本

d・今少し今しばし文禄本

・え見すなりぬるよ―そはすなりぬるよ除暇本・程草本・宮内庁四冊本

f・おくれじと―わすれじと為相本

- (12) ここに挙げた類似点のうち、①②の設定が「風に紅葉」と「狭衣物語」に共通しているということは、辛島氏も「校注『風に紅葉』」において指摘されている。
- (13) 久下晴康氏「中世擬古物語の発想と形成―「物語取り」の方法から―」（『平安文学研究六六輯』昭和五六・十一）
- (14) 中野幸一氏「うっぱ物語の研究」（武蔵野書院 昭和五六）
- (15) 注（9）の校注。
- (16) 注（4）の辛島論文。
- (17) 日本古典文学全集の本文を引用。
- (18) 注（9）の校注。
- (19) 注（10）の表参照。
- (20) 注（1）の樋口論文。
- (21) 注（9）の校注。
- (22) 神田龍身氏「風に紅葉」考―少年愛の陥穽―」（『源氏物語とその前後』（桜楓社 昭和六一）
- (23) 注（22）の神田論文。
- (24) 注（9）の校注。
- (25) 拙稿「物語『風に紅葉』主題論」（『日本文藝学三十二 平成七・十二）
- (26) 注（22）の神田論文。

（平成九年十月三十日出稿）